

## 都市隣接地林家の担い手像 とよた森林学校受講者を事例に

安藤直彦（京都大院）

はじめに

都市（DID 地区）隣接地の小規模林家では、担い手の多くが恒常的勤務につき、林業活動が低調になると言われる。とくに後継者の不在が問題になっている。愛知県豊田市では市主催の森林学校に、「素人山主森林経営講座」（以下山主講座と略す）を開講し、年々受講者の増加をみている。本研究の目的は講座参加者を対象に現在および将来の林業活動への関わり方を調査し、当該地域における林家の担い手像（担い手および施業方針）を明らかにすることである。

調査方法

過去3回の山主講座受講者40名にアンケートを配布し、23名から回答を得た（回答率58%）。調査は受講者の所有山林の現在の担い手、手入れの状態、境界の認識状況、将来の担い手、施業の方針などと、受講の動機、居住地域、山林作業の経験などを関連づけて設問をした。

結果と考察

現在の担い手：本人及び/又は親13名57%、組合委託が6名26%、手入れせず4名である。

保育の状況；境界認識：所有山林の手入れについては「十分してある」2、「一応してある」13で合計65%が「一応」以上手入れしている。また、境界認識については認識しているが3、ほぼ認識が11で合計61%がほぼ認識以上；4割は親、近隣者でないと分からないとしている。

今後の保育の担い手：本人11、組合全面委託3、組合委託だが一部は自分でやる2、同じく管理は自分でやりたい6、その他1である。

将来の施業方針については長伐期施業12で過半数、混交林化7、皆伐して広葉樹化2である。受講の動機との関連では広義の家産管理（親の後を継ぐなど含む）とした層は長伐期志向（69%）であるのに対し、社会責任（山林荒廃、環境問題）とした層は混交林化がやや多い（60%）。また現在の担い手が本人を含む家族のグループでは長伐期が多い（62%）のに対し、他のグループでは回答が分散している。居住地域との関係では地元居住者の長伐期志向に対し、市外居住者では混交林志向が強い。前者が家産管理志向であり、後者は社会責任志向ともいえる。

回答者の43%が住む旧豊田市は恒常的勤務者の多い「トヨタ城下町」であり、また、農林業センサスによると用材販売林家は61戸中1戸（1.6%）と全国平均5%を大きく下回る林業不活性地域といえる。しかし、アンケートでは今後の担い手を本人としたのが半数近くの11名（旧豊田市在住者だけでみると10名中6名）あり、管理は自分でやるなどとした7名を合わせた78%がなんらかの参加志向である。この数字は山主講座参加者という高関心層である点を考慮しても、小規模林家の林業経営離れという通説に疑問を抱かせるものである。しかも、今後の担い手を本人とした11名中5名は講座での経験が初の山仕事であったし、また11名中6名は30～50代である。これらは後継者不在という通説に対する明らかな反証となり得る。また、長伐期施業志向が家族・本人を担い手とする層に多いことは将来の林業収益を見込んだ林業経営志向を意味し、当面見返りのない労力投入を厭わない意思が見て取れる。

まとめ：アンケート回答者のほぼ半数が自分で山仕事をするとし、またその層の多くは長伐期施業志向である。このことは「林家の林業離れ」の定説に一石を投ずるものとして注目される。

（連絡先：安藤直彦 [naoan32@gmail.com](mailto:naoan32@gmail.com)）